恋文をヤキヤキした彼女【前編】

セリカ　イツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋文をヤキヤキした彼女【前編】

【Ｎコード】
Ｎ１１５０Ｙ

【作者名】
セリカ　イツミ

【あらすじ】
全校生徒から人気がある、生徒会長。先見性、判断力、決断力などは十年に一度の逸材！
そんなすごい生徒会長も、とうとうキレた。
ｐｉｘｉｖにも投稿してます。

最初にあったのは、光りではなくオトだった。
重力という縛りがなく、空中に浮いているような浮遊感は、解放感より不安の方が大きい。
快適とは程遠く、自分から感性が抜け落ちた気分に陥る。
決して自由などではなかった。
ただ風の感触だけはあった。浜の臭いのする風。
同じくオトも同じ向きから来ていた。
感覚を頼りに風上に向かう。
歩いているのか、飛んでいるのか分からないけれど懸命に…闇雲に…
決して流されてしまわないように……。
オトがだんだんと大きくなり、もうすぐたどり着くと思った。
突然…落下しそうになる！
手足も見えないのに、必死で何かにつかまろうとする。
その何かさえ分からないのに…。
「……！！っっととぉぉおおお！！危ねえぇぇ！」
死ぬかと思った直前に、両手で配管に捕まる。
下半身の腿のところまでは、すでに宙ぶらりんだった。
一番高くて、風当たりがいいからといって、屋上のさらに上にある給水塔のあるブロックで昼寝していたのが、いけなかったのかもしれない。
寝返りに、寝返りを重ねて、こんなところまで来てしまった。
枕代わりにしていた鞄が遠くに見える。
よだれが道のようになっていた。
きっと、あれが頭のあった道筋だろう。大成果だ。
だらしなくて誰もいないのに照れてしまった。
この場所は、この小さな島の中でも比較的高い所にあった。
百八十度の視界を海が占める。もう半分は本州だ。

上半身を使いコンクリートをよじ登る。
「いやぁぁ死ぬかと思った。神様今日は許して頂いて、あんがとうございます。お迎えには、まだまだ早いと思いますので……」
一階分くらいの高さだが、下手をすれば八人のヒー爺ちゃんとヒー婆ちゃんと面会することになるかもしれない。
御免こうむりたいところだ。
「いや、しかし俺の安眠を妨害されるとは……今日という今日は…許せんな」
階下は音楽室だ。真下から、たまにピアノの演奏が聞こえていた。
しかも毎回、毎回、聞こえるのは“月光”ばっっっかりだ。
俺が昼の授業をサボって屋上に来るのもランダムだが、最近はよく鉢合わせていた。
もう許さないことにした。
今日こそは、激クレーマーになることを決意した。
立ち上がって、のそのそと歩いて鞄を回収する。
よだれで丸いシミができていた。
見えないように内側に抱えて梯子を降りる。
屋上への扉をあけて、音楽室に向かう。
階段を下りてすぐ隣だ。
どこより最短で、迷う心配もない。
音楽室の扉を勢いよくあける。
「やっっっっかああぁぁまぁぁしぃぃやあああああっっ！！」
グランドピアノに負けないくらい叫ぶ。
音楽室の中は、ピアノを中心に机が扇状になっている。
ピアノの鍵盤側が窓側になっていて、ここからでは誰が弾いているか分からない。
「てめぇのせいで、こっちは落っこちかけたんだぞ！人殺しか！だいたいお天道様の一番高いときに月光なんか弾きやがって！！今は地球のうらっっ側だ！！夜にしろ！！」
確実に聞こえていると思うが、無視される。

集中しているのか、演奏は止まらない。
譜面台から、黒い小さな頭が見える。おそらく女子だろう。
「大体、授業中だ！サボってピアノ弾いていいわけねぇだろ！聞いてんのか不細工！」
ツカツカと歩いて隣に回る。やっと演奏が止まった。
「確かに聞こえたよ…。不細工って…言ったね……」
昭和からやってきた令嬢のような、黒く長いストレートヘア。。
でもどこかに閉じ込められて居るような、儚い印象。
鍵盤に蓋をして、こちらを向く。
本当に不細工か確認しようと、顔をみると…
自分より、一つか二つ年上に見えるくらいの美人だった。
唯一つの例外は目だった。その切れ長の瞳は怒りを宿して、こちらを睨みつけている。
「おお！美人の会長さんじゃねぇか！どうりで見た事あると思った！じゃあ、俺は気が済んだんで帰ります。寝ている子供もいるんで、気をつけてくださいね。」
生徒会長の白鳥（みちる）満流だった。毎週朝礼でありがたい話をする有名人だ。
クラスは離れているが、学年は同じだった。
Uターンして屋上へ戻ろうとする。が……甘かった。
「待ちなさい。君は気が済んだかも知れないが、私は済んでいない。」
襟首をつかまれて、後ろに引っ張られる。
「っっってえぇな！骨が折れたらどうするっっ！」
「そんなことより謝ってもらえるかな？」
「なにがだ？俺、何かいいましっけぇ？」
「さっき何か失礼なことを言ったでしょう？」
よそ行きのアルカイックスマイルを向けられる。
「だから美人て褒めたじゃないですか！」
「っっ……！それはいいとして！その前よ！その前！」

いいのかよ…。都合のいいことは、よく聞いてるんだな。
「ずいぶんと失礼な言葉を並べ立てていたでしょう？」
「んーとぉ。んーーとぉ。アレあれぇ？ゴメンねぇ忘れちゃたぁ！」
「もうすぐ私怒るかも…。君さっき不細工って言ったでしょう？」
「その前に、やかましいといったんだ！上で寝ている人が死にそうになったんだぞっ！」
痛いところを突かれたときは逆切れに限る。（俺の法則。第四条より抜粋）
「はぁ？なんのこと？」
「これだっ！これ」
ピアノの横をコンコンと叩く。
「大体授業中だっ！先生に言いつけるぞ！」
「ご心配なく。私は許可をもらっているので。」
「なんだそれ？許可証でもあるってぇのか？」
「あるよ。少し待ってね。」
そんなものあるのかよ……。
会長が椅子の下の鞄から、用紙を取り出す。
「これよ。どうだ！印鑑もあるでしょう？」
たかが紙切れで、何故か少し自慢げだ。
「見せてみろ。」
渡された書類の文章を読み上げる。
「貴殿の下記の行為を当校規則第７７条７７項に基づき特別に許可する。
一、音楽室に設置してあるピアノを自由に使うことを許可する。
二、本人の希望があれば授業を欠席することも許可する。ただし一定以上の成績は維持すること。
三、だからといって調子に乗らないように！！」
書類の下のほうに、学校長の名前とそれらしき印鑑。
その下には会長の名前と、猫の肉球のハンコがある。
「お前。嘘つきだろ。」

「はぁ？」
折りたたんで飛行機にして返した。
「大体この77条77項ってのが嘘臭すぎる。スロットじゃねえんだから、もっと適当な数字があるだろう？それに誰がこんなハンコ許可する？ここまでアットホームな書類はみたことがない。」
「そのハンコは、私が作った正式な印鑑だ。」
「嘘だな。家でお母さんに見つからないように、それっぽく作ったつもりかもしれないが…そうはいかない。そんな事をしていると、鼻がどこまでも伸びるぞ。」
「ふふっ。可笑しなことを言うんだね、君は。それはピノキオの事？」
あっ……ウケた。
毎週、朝礼で見る真面目な話を重苦しく真剣に語る印象とは違う。
いつもの会長とは違った見たことの無い表情だった。
そりゃ女の子だし。笑うか…。
「君は面白いなぁ。君のクラスと名前は？」
「F組の横山伸一だ。」
「そうか覚えておくよ。担任の坂本先生にも報告しておくからな。」
「はぁ？待てっ！きたねぇぞ！何しれっと聞き出してんだ！」
「邪魔が入ったので、続きはまたに今度にするよ。もうサボタージュはダメだぞ。」
椅子から立ち上がる。身長は高めで俺より少し低いぐらいだった。
鞄をもって、会長が音楽室の扉から出て行く。
そこには先ほどの儚さや、笑顔はなく…
いつもの毅然とした、この学校の生徒会長の姿だった。

会長と会った、次の週の朝礼のことだ。
その日は、現会長の任期が終わり、次期会長への引継ぎがある日だった。

全校生徒が校庭に集められ、校長先生と先生方のながーいお話が終わって、次の新任の生徒会長のムサくて暑苦しい話が終わった後だった。
「では、最後に現会長からの挨拶を以って、本日の会を終了とします。」
教頭が朝礼台から降りて、入れ替わりに会長が登りマイクの前に立つ。
「短い間でしたが、皆様の協力もあって、任期を無事満了することができました。あらためて、もう一度お礼を申し上げます。本当にありがとうございます。また、任期中に、たくさんの方から応援のメッセージをいただき、心の励みとして生徒会長の役に当たらせていただきました。」
会長は、その凛とした態度からか男女問わず全校生徒から人気があった。
先見性、判断力、決断力などを兼ね備え、部活動のキャプテン委員会役員からも慕われ、見本となるようなリーダーシップを発揮した、十年に一人の逸材らしい。
偶然とはいえ会長の意外な一面を見た音楽室の出来事を思い出すと、少し優越感が湧いてくる。
「しかし、ながらファンレターではなく、罵詈雑言や恋文のようなものも、たくさん紛れていたのも事実です。」
そういうと、他の生徒会の役員なのか…助手の女の子らしき人間が、立方体の箱を持ち出し、選挙の時の票開票のようにして、中に入ってるものを朝礼台の上にぶちまける。
あれは、……ラブレターか？それだけでなくＣＤ－Ｒや小さなチップ、あれはおそらくマイクロＳＤだろう。
その中の何枚かを会長が取り出し読み上げる。
「えー女性に興味はありませんか？もし、よろしければ、私と一緒に百合の花園の扉を開けませんか？お待ちしております…。まず、何がいいたいのか、さっぱり分からないな…。しかもお待ちしてま

すって……集合場所をしっかりと書けっっ！」
まったく、もってそのとうりだ……
なにやら助手が会長に耳打ちすると、次の瞬間会長の顔がまっかになる。
もしかすると百合の意味を知らなかったのかもしれない。
「次のお手紙を読み上げます。こんにちは初めまして。いえいえこちらこそ。さて、私は一目見たときから、あなたの事が気になっていました。ぜひあなたにお伝えしたいことがありますので、卒業式の後、校門の木の下でお待ちしております…？これは何で除けてある？」
「差出人が…。」
「生シラスどん……。っっ！馬鹿にしてっ！！」
そのまま朝礼台に叩きつける。
結局、何を伝えるつもりだったんだろうか……。
「えー次は…」
また顔を真っ赤にして。今度は手紙をビリビリに破いた。
「申し訳ありませんが、卑語が多くて読み上げることができませんでした。ご了承ください」
「まぁ以上のように、迷惑極まりない行為もございました。もし伝えたいことがあるなら、逃げも隠れもしないので、はっきり私本人の所まで伝えに来るようにしてください。これらの郵便物、および電子データは、私の逆鱗に触れに触れたので全てヤキヤキします。」
はぁ？やきやきぃ？
見やると助手がマッチ箱を取り出して会長に渡す。
そして次の瞬間、流れるような動作で火をつける。
西洋の魔女が、魔法の杖を振るったようだった。
郵便物とおそらく電子メールの入っているであろうＣＤ－Ｒが朝礼台の隅で、燃え上がる。
「以後、私宛のふざけた郵便物は、すべてヤキヤキしますので。そのつもりで。」

最後の挨拶を済ませて、その任期を終えた。
生徒会長という重責に悩まされ続けた最後の報復だったのかもしれない。
燃え上がっていく朝礼台とは逆に、会長は涼しげだった。
後に“人気者怒りの日”と学校でいつまでも語り継がれる出来事となった。

給水等で昼休みに暇つぶしに空を見ているときだった。
突然屋上のドアが開く音がした。
本来立ち入り禁止のこの場所に、一般生徒がくることは少ない。
見回りの先生かと思い覗きこむ。
そこにいたのは見たことの無い男子生徒と…あの生徒会長だった。
盗み聞きするつもりはなかったが、屋上はバスケットコートほどの広さしかない。
どうしても耳に入ってくる。
男子生徒が、会長に告白しているようだった。
結果は……ハズレだったらしい。
なにやら会長が少し話した後、男子生徒だけ帰っていった。
一緒に仲良く出て行くことなどない。さすがに、気まずいらしい…
気を使って会長が、一人屋上に残ってフェンスの向こうの海を見ていた。
「もったいねぇなぁ」
退屈だったので声をかける。
「何人そうやって、若い男の悩ましい心を玩んできたんだ？」
「……っ！そんなところにいたの？気付かなかったよ。」
給水塔から飛び降りる。
「俺なら、泣いて喜ぶけどなぁ？一度くらい告白されてみたいもんだ。ぜひお願いしますってね。」
「伸一は告白されたことがないの？」

「会長とは違いますからねぇ。どうでもいいが、ファーストネームかよ！そんな間柄でしたっけ？」
「横山なんて苗字は他にもいるでしょう？それに、私はもう会長じゃない。引退したしね。満流で構わないよ。」
「細かい奴だなぁ。」
「こういう性格なのよ。ごめんね。」
「んで？さっきの奴に、何ていったんだ？」
「……。お友達で……。」
「テンプレートかよっ！時候の挨拶じゃねえんだぞ？なんか他にあるだろう？」
「マークシートみたいに完全な答えがある分けじゃないんだから…。どうも断るのは苦手で…。」
「解答欄に花丸が付く位の、ありきたりな答え出しといてそりゃねえよ。」
「じゃあ伸一ならどうする？何て言って断る？」
「俺なら二つ返事でＯＫして、清く正しい交際が始まるな」
「伸一がその子のこと好きでもないのに？気が合わなかったらどうするの？」
】「そんときゃ解散だ。あなた様とは気が合いませんでした。ってな？」
「相手の子が傷つくでしょう？それでもいいの？」
「そりゃあ…そういうこともあるだろう。でも、そんな先の事分からないだろう？悪いが、考えても分からないことは、考えない主義だ。」
「私はそんなに簡単に割り切れないよ…。」
「そうか…そりゃ残念だ。小さいことを気にする奴だな。この前は手紙とか燃やしたくせに。」
「あぁ！アレ！たのしかったなぁ。驚いたでしょう？」
「あんなことする生徒会長は後にも先にもお前くらいだろうな。まぁさぞかしスッキリしたんでしょうねぇ。」

「そりゃあそうよ。私が生徒会長になってから、あんな迷惑行為がたまにあったんだ。ああいうのは私だって気が滅入るよ。」
「結構来てたのか？ああいう悪戯は？」
「たまにだけどね。書記の子に分別してもらって、不必要な分はためておいたの。」
「目立つ人間は、大変だな。」
俺には遠い存在だ。
見たことも無い奴にまで、あれこれ言われるのは想像以上に大変なはずだ。
俺には、できそうにない。
「礼儀のない人間に、尽くす礼儀は持ち合わせてないの。それに引退して尾を引くのは嫌だしね。なんにせよスカッとしたわ！」
「次は俺にやらせてくれ！」
「たまって嬉しいものじゃあないからね。次がないことを祈りたいわ。じゃあ私は、そろそろいくよ。サボっちゃダメだぞ？授業は受けるのよ？」
「そりゃお互い様だ。やかましいからピアノはやめてくれ。」
「君は、あの時ここにいたのか…。そうか…また先生に言っておくよ。」
「やめろ！バカ！あん時は、しぼられて面倒だったんだ！内緒だぞ！」
「冗談だよ。でもほどほどにするんだよ？」

次の日の、午後の授業中。屋上にいると、また同じ曲が聞こえてきた。
一言、いってやるために音楽室に行く。
勢いよくドアを開けて言い放つ。
「ＦＢＩだ！銃を捨てて、両手を頭の後ろにやれ！そうだ！お前は、俺を二度も怒らした！死罪だ！伏してあやまれ！」

でかい声で登場してやったが、また反応がない。演奏も何事もなかったように続いてる。
「聞いてんのか？このへちゃむくれ！」
「少し騒がしいとおもったら、また君か……へちゃむくれ？なんなのそれ？」
やっと演奏を止めてこちらを向いた。
「んなこた！どーでもいいんだっ！こっちは寝てるんだ！」
「教室にいない伸一のほうが悪いだろう？今は授業中だからね勉学に励みなさい。」
「俺はインテリチンピラだからいいのっ！」
「何なのそれは？」
「みんながいつの間にか、俺にニックネームをつけたんだ。頭のいいアウトローで一匹狼な事で有名でだからな。こう見えてテストとかいい点とるんだぞ？」
「知ってるはずないでしょう？それに私は許可をもらっていると言ったじゃない。」
「あんな嘘臭い許可証信じてたまるか！大体なんだ？あの肉球の印鑑は？」
「印鑑が必要だといわれたから、私が作ったの。それ以来ハンコ作りが趣味になったわ。この印鑑は特に気に入っていてね、私の生徒会の思い出も詰まってる。」
印鑑を取り出す。木製で綺麗に作ってある。
「それはよかったな…。大事にしとけ……っていい話をしに来たんじゃねぇ！やかましいから夜にしろって言ってんだ！」
「わかったわよ。悪かった。今日はもう終わりにするから…。それじゃあ行こうか。」
「はぁ？どこに？」
「いつも屋上に居るんでしょう？今日はせっかくだから私も行くよ。嬉しいでしょう？」
「マジかよ…汚くて、散らかっていて、何にもなくて、殺風景だぞ

？いいのか？」
「はいはい。いつも伸一は楽しくて助かるわ。その調子でお願いね。」
「聞いちゃいねぇ…。」

音楽室を出て屋上へ向かう。
屋上へ出ると、風が強くすこしうるさく感じるくらいだった。
太陽も高く、雲も少ない。
半分が海で半分が空。
今日は、水平線がよく見えた。
しばらく二人でフェンスに張り付いて、海の向こうを見ていた。
「いいのかよ？元会長が、こんなとこに居て？授業サボってることになるぞ？」
「…ん？なんて？……今日は、風が強いね。」
「全校正のお手本がこんなとこでサボってて、いいのかって聞いたんだ。」
「そういうことになるね。でも、もう会長でも何でもないからいいんじゃないかな？」
そういうと肩が密着しそうなくらい、すぐ隣まで近寄ってくる。
「内申書に響くぞ？」
「今までずっと貢献してきたんだから、少しくらいはいいでしょ？。」
全く気にかけない様子で少し笑う。
そんなに簡単にまかり通るものなのか？
俺のせいで満流まで逮捕される事だけは避けたかった。
「ここにはよく来るの？」
「まぁ、ちょくちょく。」
「いつも一人で？」
「そうだな…。ここはみんなで、ワイワイやるところじゃねえ。」
誰もいないような静かな場所で、ガヤガヤ騒ぎだいとは思わない。

それに少し一人になりたい事もあるから、ここに来るのかも知れない。
「大丈夫なの？一人ぼっちで寂しい思いしてない？友達はいるの？」
「失礼なやつだな！そりゃ普通に何人か居る。」
「じゃあ、仲良くないの？みんなで見ればいいんじゃない？」
「んーどうだろうなぁ？みんなは、あんまりこういうの好きじゃないらしい。爺くせえって言われるしな」
「確かに爺くさい。でもよくあきないね」
「うるさいな…。天気や季節で景色も違うし風向きも変わる。雪が降ったりすると、いつもより街が静かになったりする。毎日少しづつ違うもんだ。」
詩人みたいな事を言ってしまっていた。
どこか照れくさくて顔を見て話すことができなかった。
「フフっ。本当に爺くさいんだね。でもここからの眺めは綺麗だね…。」
それから二人で遠くに見える貨物船を通り過ぎるのをボーッと眺めたり、夕日が沈むときは綺麗だとか、どうでもいい話をした。
「そういえば、ピアノは昔からずっと弾いていたのか？」
「そうねぇ。小学生くらいかな？習い始めたのは。中学になってやめてしまったけど時々弾いてたの。そういえばクラシック詳しいの？」
「実はな。お前は音楽の先生かって馬鹿にされるけどな。」
「確かに、年頃の男の子が聞くもんじゃないかもね。でもテレビで流れてるのとかって同じようにしか聞こえないもの。私もよく変わってるって言われるわ。ピアノのお稽古は小学生で卒業じゃない？ってね。」
「そういえば、他に弾ける曲とかあるのか？」
「まだ練習中ね。それになるべく同じ曲を長く弾くようにしてるの。覚えておきたいから…。」
目線をフェンスの向こうの海に戻して、何故か寂しそうに見つめて

いる。
どうして覚えておきたいのか？
なぜか理由を聞いてはいけない気がした。
たとえ、踏み込んでしまっても咎められることはないだろう。
満流は何食わぬ顔で、平然と答えてくれるかもしれない。
でも、この景色の前では野暮な気もする。
「そういえば、伸一は趣味とかないの？」
「そうだな、趣味って言うのか分からんが…バイクかな？」
「バイクっていうと…。改造して走り回ったりするの？」
「そりゃいつの時代のイメージだ？そういうのじゃなくて、絶景とか単に綺麗なもん見に行ったりするんだ。」
携帯電話を取り出して、写真を表示する。
「ホレ、これ。」
「へぇ…。これはどこの写真？」
「近くの山の上から撮った昼間のやつ。夜景も綺麗だから、撮ったんだが全然写らなかったな。」
な？と夜景を写した真っ黒の写真を見せる。
「これは確かにどこの場所かも分からないね。デジカメとかは買わないの？」
「写真撮るのが趣味じゃないからな。そりゃただの記念だ。この目で実際に見るのが好きなんだ。」
「他には？どこか遠いところにも行ったりしたの？」
「これとかは、とっておきだな。」
去年の夏休みの時に一人で行った、北海道の写真を見せる。
「わぁッ……！すごいっ。これはどこ？」
いつも澄ました雰囲気の満流が、この時は別人ように大きな声で驚いていた。
「ただの国道なんだが。すごいだろう？」
写真には建造物など一切なく平野が広がり、道が真直ぐにどこまでも続き地平線が見える。

「ただの真直ぐの道なんだが……絶景だったな。実際見ると圧倒される。」
「これは…すごい……。場所はどこなの？」
「北海道だ。夏だったから雪は積もってなかったけどな。」
こんなに喜んでもらえると思わなくて、こっちも少し嬉しくなる。
「でも残念。北海道じゃ簡単には行けないわね」
「思ったほど遠くないぞ、三日もあれば帰ってこれる」
すると授業の終わるベルが鳴る。いつもより随分と早く感じた。
「ありがとう！じゃあ、私は戻るから。また来てもいいかな？」
「別に俺の場所って、わけじゃねぇからな。好きにしろ」
「そう？じゃあ遠慮せずまた来る。じゃあね。」
そういって少し笑った後、教室に帰っていった。

次の日の昼休み。
また扉が開く音がしたので、満流が来たかと思って覗き見ると…今日もまたお連れ様もご一緒だった。
どうやら告白ラッシュらしい。
卒業前に満流のハートを射止めたいという人間は多いらしい。
みんなが認める学校の高嶺の花は今日も大人気だ。
「伸一…。いるのか？」
「またフったのか？大人気商品だな。」
給水塔から降りて、壁にもたれて座る。
「ひどいな。人をバーゲンの目玉商品みたいに言って。」
そういって、すぐ隣に座る。
「あまり違わないだろう。大体なんでわざわざ屋上までくるんだ？俺への見せつけか？俺がもてないって事はよく分かってるんで、間に合ってるんだが？」
「別にそんなつもりじゃないよ。たまたま連れて来られる場所がここのことが多いの。」

「だからって、そうみんながみんな屋上まで連れてくるか？」
「ここは人が少ないから最適な場所なんだろうね。今日は付いてきて下さいって言われたんだけど、どこに連れて行かれるか分からなかったからここにしたの。」
「なんだ…。じゃあ見せつけじゃないか。」
「違うってば！だいたい私だって女の子なんだよ？変な事されないか私だって心配なんだ。人気の無いところだと、何されるか分からないでしょう？」
「じゃあ賑やかなところにしてもらえよ。」
「そういうわけにも行かないでしょう？それに…ホラ……ここだとさ何かあっても…助けてくれるかなって思ったの……」
「どちらさんが？」
「伸一に決まってるでしょう…っ！鈍感ね！何か改めて言うのも恥ずかしいものね…。」
当たり前だ。言わせたんだから。
でも、こうも頼りにされると少し嬉しくもなる。
「分かってるよ。そりゃもちろん何があっても助けるけどな。ご利用ありがとうございます。でも、もしかしたら俺は妨害するかも知れんぞ？」
「どうして？」
「そりゃ、俺より幸せな人間がまた一人増えるんだ。黙って指くわえてみてるはずが無いだろう？場合によっちゃ断固阻止だ。」
「そうなの…案外意地悪なのね…。」
「俺なりの優しさだ。それで今日は何てお返事したんだ？」
「……。竹馬の友で…」
「たいして前と変わってないじゃねぇか…。落第だな。」
「フフッ冗談。でもちゃんと断ったよ。お友達っていう文言は変わってないけどね。そういえば、伸一は告白したりしたことはないの？」
結構突っ込んだ質問だったが、聞かれる分には別に構いはしなかっ

た。
「そりゃあ、あるっちゃあるんだが……」
「ダメだった？」
「あぁ。仲のいい友達がいいってさ。」
「やっぱり、伸一でも傷ついた？」
「そりゃ俺だってへこむ。お前俺を何だと思ってんだ？」
実際あまりいい思い出じゃなかった。お友達という圧倒的な壁を登るのに、努力や研鑽でどこまで太刀打ちできるのか…。あるいは相思相愛の奇跡を待つだけなのか…。
いつも結局分からなかった。
「ふーんそっか。こんなこと思うの私だけかもしれないけど…付き合うって何なんだろうね。」
俺が知りたい。はっきりとした定義などあるのだろうか？
「どっからが付き合ってるとか私にはよく分からない。」
「俺の友達は、どっちも告白した事無いって言ってたぞ。」
「でしょう？お互いがコンセンサスを得ているかと思うと、必ずしもそうではない。しかも付き合って、何をしたいのかもよく分からない。」
「そりゃあ、アレじゃねえのか？楽しくおしゃべりしたり、休みの日にはデートしたりとか…」
「別に付き合わなくたって出来るだろう？何なら今からどこか行こうか？」
デートに行くのは抵抗がないらしい。基準がどこか分からなかった。
「じゃあ、アレだ。チューしたいとか、他には…」
その先は、少し言いづらくて俯く。
「悩ましい“あれこれ”か？」
おもしろ可笑しそうにそうに、下から覗きこまれる。
「っ…！。まぁそんなところだ。」
「でも君達男は別にちょっと可愛いかったら、誰でもいいんだろう？」

「そんな事は…。」
ないこともなかった…。全否定できないのがダサすぎた。
「ありえない事だが、あっても正常ではあると思うけどな。」
「つまりあるんじゃないの…。馬鹿ねぇ。」
「仕方ねぇじゃねえか。男ってのは、そういうもんだ。」
「そうでしょう？付き合っていなくても、そういうことする人はいるもの。それに恋愛感情が先なのか、友人の延長線上のような関係性が先なのか…。いつも思うけれど理解不能だわ。」
「そうだな…。じゃあ仲のいいお友達の拡大版だ。俺が一票入れよう。」
「じゃあ別に告白なんか必要ないんじゃないの？」
「イヤ必要だ。あなたと仲良くしたいです。あわよくば、独り占めしたいです。っていうのが重要だ。」
「納得いかないわ。それは、よく言う束縛って奴じゃないの？」
「違うな。お互い楽しくやっていこうってのが大切だ。」
「楽しくなくなったら？」
「要相談だ。だから喧嘩するんじゃねぇの？」
「仲直りできなかったら？」
「解散だ。そういうこともある。仕方ないもんだ。」
「大人は永遠の愛を誓い合うのに？」
「都合によっちゃ解散してるだろ？“たられば”はやめろ。小さいことは気にするな。そうだな…。」
立ち上げって言い放つ。
「じゃあ俺とデートしてみるか？今度の休みはどうだ？」
「デート？」
「そうだ。小さいことばっか考えんな！でかいものを見れば何か分かるかもしれない。さっきの夜景のとこに連れていってやる。昼間でも十分眺めはいいぜ。」
なるべく自然に聞いてみる。断られるとダサい。心の中で神様に頼み込む。

「わかった。じゃあ次の休みね。明けておくわ」
心の中でガッツポーズをする。
満流と連絡先を交換すると、ちょうどチャイムが鳴った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1150y/

恋文をヤキヤキした彼女【前編】

2011年11月1日03時14分発行